巻頭エッセイ

ナンバーワン・チキン

荻野アンナ　Ogino Anna

Opening Essay

わずか二日の滞在だが，沖縄でアメリカ統治下の話を，あれこれ仕入れてきた。

「こちらの女性は，アメリカという名前が多いねえ」

米兵が首を傾げた。よくある名前とは「うさ」で，アルファベット表記なら「USA」になる。

同じ日本でありながら，パスポートがなければ行けなかった沖縄。「ヤマト」の人間は，復帰前の現実を，悲劇のひとことで括りがちである。実際には物怖じせず異文化とつきあい，それなりに折り合いをつけてきた側面もある。

沖縄のお年寄りは，教育を受けた若い世代より，英語がウマい。オジィ，オバァが当たり前のようにハンバーガーやステーキを食べ，喫茶店で「アイスワラ」を頼む。教科書式の「ウォーター」ではなく，耳で覚えた「ワラ」が未だに生きている。

そこで「英文和訳」を一題。ヒント，ライカムは地名である。ちなみにこの問題，私はまったく歯が立たなかった。

「ナンバーワン・チキン・スピーク・タイム，ユーカム，ミーカム，ライカム」

さて正解である。一番鶏（ナンバーワン・チキン）の鳴くころに，ライカムで会いましょう（ユーカム，ミーカム）。

「一番鶏」はちょっとムリがあるが，「ユーカム，ミーカム」は使えそう。もう一例，挙げる。台風で屋根を飛ばされた人が言ったという。

「タイフー，カム。マイ・オンボロヤ・ゴー」

とにかく通じさせてしまおう，という迫力が爽やかである。むろん，より込み入った話を可能にするのは文法である。不思議なことに，文法を獲得すると蛮勇を失う。時には破格やいい加減を恐れない心も必要だと思う。

私の住んでいる横浜も，沖縄ほどではないが，インターナショナルな街である。繁華街の伊勢佐木町と港の中間に「本町通り」がある。最近，通りの語源を教えてもらった。昔，上陸した外国船の船員さんたちは，夜ともなると，伊勢佐木町に飲みに行った。街灯の整備されていない頃のこととて，帰りは闇の中を手探りの状態となる。路地を抜けて，広い大通りに出ると，港はすぐ先と知れる。無事辿り着いたと喜んで，歓声を上げた。

口語英語で「やったぜ」は「ハンキー・ドーリー」。訛って「ホンチョー・ドーリー」，本町通りになったとか。ここまで書いてから，父に聞いてみた。

「『ハンキー・ドーリー』のスペル，分かる？」

Hunky-dory の後に，父は「だと思う」を付け加えた。フランスで生れ，アメリカで育った父は，日本在住半世紀。日本語カタコトのまま，英語のスペルも怪しくなっている。結果，わが家では“He is very シブチン , n’est-ce pas?”式のごた混ぜが横行している。なぜケチではなくシブチンなのか，というと，母親が関西出身なのである。このややこしい家庭のおかげで鍛えられた。コトバは度胸，hunky-dory と，相手に向かって踏み出す一歩を大切にしたい。

おぎの　あんな

横浜市出身。作家，慶應義塾大学文学部助教授。専門は16 世紀のフランス文学。1991 年「背負い水」で第 105 回芥川賞を受賞。現在，大学で教鞭をとりながら執筆活動，テレビ，ラジオ，講演など幅広く活動している。趣味は落語，ブタグッズコレクション，大道芸。